

Title	紙衣和紙による衣服造形
Author(s)	定延, 久美子
Citation	デザイン理論. 2008, 53, p. 120-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53418
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

紙衣和紙による衣服造形

定延久美子／大阪樟蔭女子大学

現在、紙は様々な用途に活用されているが、日本では性能の高い和紙を材料にした紙衣という紙の衣服が古くから着用されてきた。紙衣とは和紙で作った衣服で、この紙衣和紙は楮から漉いた和紙にこんにやく糊や柿渋、寒天を塗布して揉みやわらげて作られる。紙衣は木綿より安価な衣料として江戸時代の庶民の間で広まったが、明治以降には機械生産による木綿の普及とともに消滅した。

近年では環境への配慮という視点から、和紙や紙の衣服なども発表されているが、本作品は独特のテクスチャーを持つファッション材料としての紙衣和紙に注目し、その特徴を生かした衣服デザインを目的として制作した。

作品制作に使用する紙衣和紙は、和紙にこんにやく糊を塗布して作り、衣料材料試験によって基本的性能を明らかにした。この試験結果を一般的な衣服材料である布地と比較することによって導き出した特徴を生かし、実際に着用できる衣服作品として制作した。

紙衣和紙の制作

和紙はパルプ状の楮から溜め漉き法で漉き、手で軽く揉んで皺をよせた後、木製の棒に巻きつけて圧縮することで縮みよせる。

細かな皺ができて柔らかくなった和紙の表面にこんにやく糊を塗布して、天日干しで乾燥させる。こんにやく糊は、こんにやく芋粉を水に溶かして水糊のような状態にしてスポンジに含ませ、和紙の表面に塗布した。こんにやく糊が乾いた後に再び木製の棒に巻きつけて圧縮する。こんにやく糊の塗布と棒に巻きつけて圧縮することを繰り返して和紙をや

わらかく強靱にする。

紙衣和紙の性能試験

性能試験の試料は「紙衣和紙の厚地」「紙衣和紙の薄地」のほか比較材料として、こんにやく糊を塗布せずに揉んでやわらかくした「和紙もみ紙」と一般的な衣服材料用の布地として「シーチング」を加えた4試料とした。試験項目は、衣服材料の基礎的性能を知るために必要と思われる「厚み」「目付け」「引張」「引き裂き」「剛軟度」「破裂」の6項目とした。なお、今回の性能試験は三河繊維技術センターにおいて、日本工業規格（JIS）の規格に沿って試験した。

紙衣和紙の厚地は「厚み」と「目付け」の値から、厚みはあるが大変軽いことが明らかになった。「引張強度」ではシーチングのタテ地での測定値が最も高かったが、ヨコ地ではシーチングと紙衣和紙の厚地が同程度の強度となった。「引き裂き強度」でもシーチングのタテ地での測定値が最も高かったが、ヨコ地ではシーチングと紙衣和紙の厚地が同程度の強度となった。「剛軟度」では、シーチングと紙衣和紙の値を比較すると布地との違いは大きく、紙衣和紙の硬さやハリが際立っている。「破裂強度」では、紙衣和紙が最も値が高く、シーチングよりも破裂に対する強度が高いと判断できる。紙衣和紙の薄地は、紙衣和紙の厚地より薄く、硬さやハリも少ないが強度に関する値は低かった。

作品制作

性能試験の結果から、紙衣和紙の厚地に関

しては衣服材料としての強度に問題はないと判断し、これを材料として作品を制作することにしたが、紙衣和紙の特徴である硬さやハリ、厚みに配慮した衣服制作が課題となった。衣服は人体の形態に合わせて曲線が多く含まれるパーツをつなぎ合わせて作られることが多いが、紙衣和紙の硬さとハリには不向きな衣服構成であると判断し、方形の和紙をそのまま用いて衣服の形になるようにデザインした。

紙衣和紙は布地のように裁ち端が解けてこないのが、ブラウスは1枚の紙衣和紙の中央を方形に切り抜いて衿ぐりにし、裁ち端の始

末は施さない。また、性能試験によって引き裂きに対する強度にも問題はないと判断できたため、ブラウスの袖ぐりと脇にあたる紙衣和紙の両端には小さな切込みを入れてリボンを通し、このリボンを引き絞り結んで着用できるように制作した。作品に使用している厚地の紙衣和紙は、シーチングの約6倍の厚みがあるため、手縫いやミシン縫製によって組み立てる方法ではなく、こんにゃく糊で紙衣和紙をらせん状に9枚貼り合わせる方法でラップスカートを制作した。スカートのウエスト部分もブラウスと同じ方法でリボンを通し、これを結んで着用できるように制作した。

